

# 異質さと向き合うためのダイアローグ

## —バフチン論からのメッセージ

東京外国語大学大学院総合国際学研究院 准教授  
**田島充士** (たじま あつし)



### Profile — 田島充士

2006年、筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科心理学専攻修了。高知工科大学専任講師を経て、2012年より現職。博士（心理学）。専門は教育心理学、発達心理学、臨床心理学。著書は『「分かったつもり」のしくみを探る』（ナカニシヤ出版）など。

ダイアローグ（対話）といえば、ロシアの言語学者・美学者、M.M.バフチンを想起する読者も多いだろう。本概念をシンプルに捉えるならば、二人以上の人物が意思を交わす行為を示すものといえる。本論ではバフチンの捉えたダイアローグ概念を極力簡潔に解題してみたい。さらに「異質な他者と向き合うことの困難さ」という現代社会が抱える課題にも触れ、これに向き合うためにバフチンのダイアローグ論から引き出せるメッセージについても論じる。

### 絶対的な分かりあえなさとのダイアローグ

バフチンは、他の誰にも共有することができない、世界に向き合う主体としての自己が占める、唯一でかけがえのない視点から世界の意味を解釈していくことを、彼の人間研究の出発点として描き出した。このような主体の自己視点（意識）の唯一性を捉え、バフチンは「視覚の余剰」と呼んだ。

わたしの外にあって向かい合っている人物の全体をわたしが観察するばあいに、実際に体験されるわたしと彼の具体的な視野は一致しない。……わたしたちがお互いに見合うとき、わたしたちの瞳には二つの異なる世界が映っている。（バフチン、1999, p.145）

私と他者が、同じ空間・時間を共有することは決してあり得ないのだから、そこから引き出される世界の解釈も一致することはあり得ない。したがって、私が私の内部で考えていることは、私以外の他者には決して規定できないと

いうことになる。バフチンがいうダイアローグとはこのような、絶望的なまでの他者との「分かりあえなさ」から立ち現れてくる概念なのだといえる（Clark & Holquist, 1984）。

さらにこの他者は、私の考えていることを理解しないばかりか、外在的に、私の言動の意味を規定してしまう侵入行為すら働く存在でもある。例えば子どもの行動は生後すぐに養育者によって一方的に意味づけられ、言語的に構造化される。このような他者の働きかけに対し、「わたし」は独自性を主張して抵抗する。バフチンは前者の動きを「求心力」、後者の動きを「遠心力」とも呼んだが、ダイアローグは、この遠心力と求心力の闘争過程としても描きだすことができる概念といえる。

人間の内には、本人だけが自由な自意識と言葉という行為をもって解明することのできる何ものかが存在しており、それは人間の外側だけを見た本人不在の定義ではけって捉えきれないものなのである。……人格の真の生を捉えようとするなら、ただそれに対して対話的に浸透するしか道はない。（バフチン、1995, pp.121-123）

しかしバフチンはこのような、自己意識が他者に規定されきれない未完結な部分を持つ存在であることを高く評価していた。自己同士が接触する（ダイアローグが始まる）際、相互の見解がぶつかることにより新たな見解が創出し、互いに変化し得るからである。桑野（2008）は、このようなダイアローグの性質を「ともに声を

だすこと＝協働」および「さまざまな声があること＝対立」の両面が同時に成立することと捉えた。バフチン論において「声」とは、主体の視点から解釈される世界観を示す概念と解釈できる。つまり外的にも内的にも、話者らの声が接触し、互いに変化を被りつつも、同時にそれぞれの声は完全に一致することがないからこそダイアログに終止符は打たれず、世界に向かう人々の解釈も常に更新し続けるのである。

この原理は、過去に発せられ固定化されたように見える書物に対しても適用される。なぜならば、この過去の声は、本を読むという行為（＝読者と著者とのダイアログ）の中で、その内容が更新されていくからである。バフチンは晩年の著書において、このダイアログの果てしなさを以下のように表現している。

言葉には始めも終わりもないし、対話のコンテキストは果てしがたい……過ぎ去った、つまり過去の時代の対話から生まれた意味というもの、決して固定した（最終的に完結し、終わってしまった）ものではない。それらはつねに来るべき未来の対話の展開のなかで変わっていく……絶対的な死というものはない。意味というものにはそれぞれ、その誕生の祝祭がある。（バフチン、1988, p.343）

つまりバフチンの論において、他者との絶望的なまでの分かりあえなさとは、人々が既存の世界に一方的に飲み込まれることなく、ダイアログを通して新たな意味を創出する原理であり、世界の革新性へのかけがえのない希望をも示すものであるように思われる。澤田（2009）は、このようなバフチンのダイアログ論の逆説性を評し「対話の不可能性に可能性を見る」と呼んだ。我々の声は相互に異質であり、永遠に融合し得ないからこそ、常に、ダイアログを通じた更新可能性を担保しているのである。

### 他者に対する「仲間」意識により変化するダイアログの言葉

しかしそうはいっても、我々は「相手は自分

の発言について異なった解釈を引き出してはいないか」などといちいち深刻に考えるだろうか。むしろ家族や仲間など、よく接触する相手との間では、使用する言葉の選択に頭を悩ますこともなく、スムーズに意思伝達していることのほうが多いのではないだろうか。バフチンは、このようなダイアログの日常的な運用実態についても分析を行っている（バフチン、1979）。

例えば、ダイアログを交わす空間を共にし、また生活経験をも共にした知り合い同士では、話題に関する多くの前提知識の共有が期待できる。その結果、構文的に極端に省略された合言葉のような言語であっても、ダイアログが成立するケースも出てくる。バフチンはこのようなダイアログで使用される言葉を「生活の言葉」と呼んだ。

一方、不特定多数の読者を想定する芸術作品（詩・小説）や科学的論文など、話者が言表の中にすべての意思を詰め込まざるを得ないようなダイアログの存在も指摘される。バフチンは、これを「詩の言葉」と呼んだ。この種のダイアログでは、時空間を異にする他者と交流するため、相手との前提知識の共有はあまり期待できない。そのため話者は必然的に、自分の意思だけではなく、その前提となる文脈までも言語化し、他者に伝わる表現を探らなければならない。このようなダイアログの場合は、話者は生活の言葉と比較して、より困難で緊迫感のある言語操作を行うことになる。

つまりバフチン論の基本原則ともいえる、他者の声との「絶望的なまでの分かりあえなさ」とは、交流相手との話題に関する前提知識の共有という軸が入ることで、我々の日々の実践的直感としては、温度差が出てくるということである。無論、話者らの声が完全に一致することはないので、あくまでもこの共有は話者が他者に対して抱く「期待」にすぎないのだが、このような感覚を前提として交わされる省略語を使ったダイアログが破綻しない限り、この期待が裏切られることもない。そして、この行為が続くことで、互いが同じ思想を共にする「仲間」であると話者の間で後付け的に確認され、集団が形成されていくことになる。

### 自由なダイアローグをはばむ価値判断としてのモノローグ

しかしバフチン論の醍醐味は、以上の議論をベースとしつつも、交流テーマについて前提知識の共有が期待できず、異質な見解をもって迫る他者と、どのようにつきあうのかという価値判断(＝イデオロギー)の分析にあると思われる。それは具体的にいえば、相手の声の異質性を消去し、自分の声を強制的に押しつけようとするのか、それとも、その異質な声との共生を目指すのかという人々の判断といえる。

このことは、ドストエフスキー小説を題材に、彼独自のダイアローグ論を発展させた『ドストエフスキーの創作の問題』(バフチン, 2013)の中で詳細に検討されている。バフチンは作者と小説の登場人物たちとの関係を分析し、互いに独立した意識を持つ彼ら同士の相互交渉を記述していく中で話を進めるような小説の形態を「ポリフォニー(多旋律)」と呼んだ。一方、作者が登場人物たちを自身の規定したストーリーに隷属させるような形態を、「ホモフォニー(単旋律)」もしくは「モノローグ」と呼んだ。

このモデルは、話者とその発話を聞く他者との相互作用における、発話の引用を巡る価値判断を示すものとして発展的に解釈可能である(Clark & Holquist, 1984)。すなわち発話者がそれぞれの立場からの声を引用し、自由な意味づけを行うことを許す「ポリフォニー」か、もしくは相手独自の再解釈を許さず、話者の発した声の通りに暗唱することを要求する「モノローグ」か、ということである。

そしてバフチンはモノローグを、言葉の意味構成に関し、話者間の自由で対等なダイアローグをはばむ権威主義的な価値判断として攻撃した。一方、その対義概念としてのポリフォニーを、独立した意識を持つ話者が相互に新たな意味を見出す自由なダイアローグの性質を示す概念と意味づけ、理想化した。

### 「分かったつもり」という問題

バフチンがこのようなダイアローグ論を展開

した背景には、彼が生きた当時のロシアにおける独裁的な政治状況の影響があったとされる。圧政的な権力者の声に対して異質な声を発することが、社会的・身体的な死を意味する閉塞的な時期もあったことを考えると、このバフチン論の時代的意義は大きい。

それでは、現代社会においてはどうか。少なくとも欧米や日本において、かつてのロシアに匹敵するような独裁的政治体制は今のところ出現してはいないし、市民の言論の自由も保障されている。しかし筆者はそれでもなお、バフチンの主張は現代社会において高い意義を持つと考える。それは、現代に生きる若者たちに共通してみられる、異質な他者への拒絶感の高まりが気になるからである。

現代青年には、親しい関係性を基盤とする人物との関係に閉じこもり、その関係の外に住む人々との関わりを避ける傾向がみられるとされる。藤井(2009)は、こうした青年たちの特徴を、澄んだきれいな水にしか住むことができないことになぞらえ、「マリモ化」と呼んだ。

このマリモ化は、青年たちのダイアローグにも当然、影響を与える。学校教育場面においてはそれは、例えば、以下に示すようなダイアローグに特徴的に現れているといえる。

**A** : 君は地球の方が動いているというけど、電車に乗っているとき、動いているって感じるけど、地面の上だとそんなに感じないよ。

**B** : そんなこといっても、地球が回っているんだ。教科書にもそう書いてある。

(西川, 1999 より一部改変)

教科書の記述から判断すれば、地動説を支持するB君の方が「正しい」。しかし彼は、天動説を支持するA君の、日常経験知に基づく疑問に答えない。筆者は、A君の発言に見られるこのような傾向を「分かったつもり」と呼んだ(田島, 2010)。

この分かったつमोरいの問題は、彼らの多くが同じ思考傾向を持つ仲間同士で固まり、その解釈に疑念を抱く者の参加を排除する傾向、つま

りマリモ化しているという点にある。自分たちが支持する意見を「正しい」と信じて疑わず、多角的な検証を求める異質な他者の声との論理的な交渉を拒絶するという意味で、意識的にせよ無意識的にせよ、彼らはバフチンのいうモノローグに近い価値判断を行っている。

このことは何も学校教育に限った話ではない。近年、「ヘイトスピーチ」等に代表される、異質な社会集団（民族や国家を含む）に対する不寛容な雰囲気、日本を含む多くの国々において強くなっている。様々な立場の社会集団が関わるクリティカルな問題に関して、自分たちが掲げる「正義」をたてに仲間を固まり、相手の声を圧殺し自分たちの声を暴力的に押しつけるような動きが多くなっている。このような、自らの世界観への融合を他者に強迫的に求めるモノローグ的価値判断に基づく動きが政治問題にまで発展しつつある状況を見ると、異質な他者との自由なダイアローグを重視したバフチンの論は、現代においてもなお、価値を保ち続けると強く感じる。

### 異質さと向き合うためのダイアローグを求めて

それでは、我々はどのように生きればよいのか。この問いに対するバフチンの答えは、「それでもなお、異質な他者とのダイアローグに向き合い続けることを価値づけよ」というようなものになるのだろう。

我々は一人ひとりが本来、未完であり続ける、かけがえのない存在である。その我々が社会集団を形成し、相互の異質性を認めつつ、豊穡化し続けていくためには、桑野（2008）の言葉を発展的に引用するならば、「ともに声をだすこと＝互いに交渉を続けること」および「さまざまな声があること＝異質な他者への関心を保ち続けること」を価値づけなければならないということである。

先述の分かったつもりの事例でいえば、日常経験を根拠に、教科書の地動説の解説に違和感を覚える友達に対し、共に納得のゆく説明モデルや実験プランなどを話し合ってみる、ということである。こうしたダイアローグを生きるこ

とは、話者らがそれぞれの声を知り、また他者の異質な声と向き合い続けることを価値づけること、また片方の話者のみに帰属しない、新たな世界の解釈可能性を見出すことにつながるだろう。そしてより多くの人々がこのような経験を経ることは、否応なく異文化集団との相互接触にさらされる現代社会を、より強靱でしなやかな集団へと深化させてゆくことだろう。

## 付 記

本研究は、日本学術振興会・科学研究費助成事業（課題番号 23730621）による助成を受けた。

## 文 献

- バフチン, M.M./磯谷孝・斎藤俊雄（訳）（1979）『フロイト主義：生活の言葉と詩の言葉』新時代社
- バフチン, M.M./新谷敬三郎・佐々木寛・伊東一郎（訳）（1988）『ことば対話 テキスト』新時代社
- バフチン, M.M./望月哲男・鈴木淳一（訳）（1995）『ドストエフスキーの詩学』筑摩書房
- バフチン, M.M./伊東一郎・佐々木寛（訳）（1999）『「行為の哲学」によせて』美的活動における作者と主人公』他：一九二〇年代前半の哲学・美学関係の著作』水声社
- バフチン, M.M./桑野隆（訳）（2013）『ドストエフスキーの創作の問題』平凡社
- Clark, K. & Holquist, M. (1984) *Mikhail Bakhtin*. Cambridge: Harvard University Press. [クラーク, K. & ホルクイスト, M./川端香男里・鈴木晶（訳）（1990）『ミハイール・バフチーンの世界』せりか書房]
- 藤井恭子（2009）「友人関係の発達」宮下一博（監修）松島公望・橋本広信（編）『ようこそ！青年心理学：若者たちは何処から来て何処へ行くのか』ナカニシヤ出版 pp.54-64.
- 桑野隆（2008）『ともに』『さまざまな』声をだす：対話的能動性と距離。質的心理学研究, 7, 6-20.
- 西川純（1999）『なぜ、理科は難しいと言われるのか？：教師が教えていると思っているものと学習者が本当に学んでいるものの認知的研究』東洋館出版社
- 澤田稔（2009）〈脱自〉としてのカリキュラム：バフチン言語哲学による「個性」概念の再検討。名古屋女子大学紀要（人文・社会編）, 55, 49-58.
- 田島充士（2010）『「分かったつもり」のしくみを探る：バフチンおよびヴィゴツキー理論の観点から』ナカニシヤ出版